

社説

海部病院分娩再開

婦人科医が2006年7月に退職して以降、徳島大病院の医師派遣で分娩体制を維持していたが、産科医不足で派遣できなくなったため、翌年9月に休止に追い込まれた。再開に向けては、医師確保を目的

したい。
海部郡で唯一分娩を扱っていた同病院では、産

師の実習や医療機材の点検・整備などを終えて、ようやく分娩再開の運びとなった。

海部病院では現在、同郡3町や高知県東洋町の妊婦15人が検診を受けており、そのうち11月下旬出産予定の1人が同病院での出産を希望しているという。

今後は分娩体制を軌道に乗せていく。県は本年度を「地域医療再生元年」と位置づけ、医師の養成・確保や救急医療体制の充実に取り組んでいるが、医師や診療科の偏在の是正にも、よりいっそう力を入れていく必要がある。

休止している分娩を来月から再開することになった県立海部病院の産婦人科

産婦人科医は勤務にさらされている。しかし、産婦人科医を増やすには厳しさを増す労働条件の改善が欠かせない。国も自治体も、地域でのお産を守る体制づくりに全力で取り組んでほしい。

める考えを示した。

かつて医学部の新設についても検討を始めた。

体制の充実が課題だ

牟岐町の県立海部病院が、産科医不足で休止していた分娩を10月から再開することになった。

徳島大学病院の産婦人科医3人が交代で担当し、当面は出産時リスクの低い2人目以降の通常分娩が対象となる。まだ完全な形とは言いが、約3年ぶりの再開をひとまず歓迎した。

さらに分娩に携わる助産師や看護士の確保や体制整備を進める。医師の確保や体制整備を進める。医師の確保や体制整備を進める。



年」と位置づけ、医師の養成・確保や救急医療体制の充実に取り組んでいるが、医師や診療科の偏在の是正にも、よりいっそう力を入れていく必要がある。

全国の産婦人科医の総数は、わずかに増加したが、それによって過重労働が改善されたわけではない。

深刻な医師不足を受け、国は全国の大学医学部・医科大学の定員を増やしている。さらに、1980年以降初めてな